SPINOZAの思想に關して

德永圓應

一つのものがよりよきものに進み行く何ものかを含み得るなら、私はこのことを思ひつゝ印象のままに筆をとらう。

父祖の信仰に忠實であるイスラエル民族の同胞からは、神を冒瀆する邪見を固執したことによつて、斷然ユダヤ教會から破門された若かりしスピノーザは、アムステルダムの町を離れて孤獨と寂寥の内に靜かな冥想をこほして、彼自身にまで活ける神を認めんことに努力してゐた。

あくまで批評的であり研究的であつた彼は、自身に迄明晰判明に表象せられ得ないものに、確實な信を置くことは出來なくて、絶えざる疑と思索の歩を運ばせてゐた。それで新興の科學や、迷信を打破せんとする新しい信仰に、自由な態度で面して行つた。そこには彼の思想に親密なものがあつた。プロテスタントの神學、ルーテルの信仰、イタリー自然哲學者の思想、デカルトの哲學はそれ等のものの内の親しいものであつた。威嚇壓迫誤解憎惡なるものゝ蝟集に會つてさへ、彼は大膽に思惟を進めて行つた。それは只心の平和を求むる爲であつた。論理の道を踏む正しい認識が、心の平和をもたらすであらう。そして彼が救はれしものは第三種の認識卽ち直觀知と呼ばれるものに由り認識であつた。彼の思想に於ては、その認識はやがて知的愛に外ならない。美しい愛によつて安らかなるを得た。彼は神に陶醉してゐたのである。彼の全生涯に於ける、精神的なものに於ける精神的努力は、最後の主著『倫理學 ETHIK』となつて現れた。

方法に就て。彼は Descartes に學んで幾何學的方法に由て眞正なる認識に到達せんとした。何者幾何學は最も精確な演繹的方法に由て築かれた、科學の女王として認められ、且正しい認識は、嚴密な數學的吟味を經て來るべきものとせられたからである。眞理の要素として要求せられねばならぬ觀念の明晰性と判明性とは、かゝる方法のみが發見し能ふとせられたが爲であつた。デカルトと同じく彼にとつても、自己檢格が眞實なる認識への第一歩であると思はれた。此過信は確に獨斷的傾向を起す原因であり、又彼の哲學の破綻である。而して幾何學的な道を辿り且明晰判明を要求する思辨的哲學の運命は、十八世紀に至つてはその方法の繼承の可能性はなくなつて、新しい方法が發見せられねばならなかつた。何者知識の問題を後にしては進み得ることが出來なかつたから。單なる思辨によつて臆面もなく超經驗的實在を解決する前に研究方法の革新が不可避的に起らねばならなかつた。然し彼の精神から迸り出でたる思想は、冷やかなる幾何學的方法の内に躍動してゐる温かい生命のはたらき其者を、感ぜしめるのである。一人の心に徹したものは、又萬人の心に透徹しなければならない。

神論　デカルトは實體を、自己の存在の爲に他のものの存在を要せざるもの、と定義した。而して物體と精神とが、神に迄依屬する限りに於て、嚴密に定義に從ふなら、『實體とは多數でなくて唯一であり得る。』(第一部定理五證明)とのスピノーザの證明が許されなければならぬ。『實體とは、それ自身の中にあり且それ自身に由て理解されるもの、卽ちその概念を形成する爲に、他のものゝ概念を要しないもの、と私は解する。』(第一部定義三)となつた。かくの如き意味に於て物は實體ではない。精神も實體にふさわしくはない。唯神のみ實體である。

神とは『絕對に無限な實在、卽ち各屬性が永遠無限な本質を表示する處の無限な屬性より成れる實體』(第一部定義六)で

ある。彼は實體の定義から進んで、實體の性質特質を演繹論證した。

實體は他の實體から生ぜられることは出來ない。何者實體が他の實體から生ぜられると假定するならば、それは既に實體ではない。卽ち他のものに由て存在を得ることは考へ得られないからである。其故に實體には存在がその性質として依屬してゐなければならない。卽ち實體はそれ自身の原因である。神は自己原因であつた。何者『本質が存在をそれ自身の內に包含するもの、卽ちその性質が、存在することしてのみ考へられ得る。』(第一部定義一)が故である。自己原因である神は存在しなければならぬ。『各永遠無限な本質を表示する無限なる屬性より成立せる實體、卽ち神は必然に存在する。』自己原因である神の存在は神の本質である。神は自身に完全である。絕對無限な完全者は存在しなければならぬ。又此程確實であるものはない。

アンセルムスは、神が完全なる絕對的存在者であることを思惟せられねばならぬことから、神は存在すと論證した。デカルトは神の觀念は性具的である。不完全が、完全者の表象の原因ではあり得ない。不完全を意識する者の、表象する完全者が、吾々の有する完全者の表象の原因である。原因として神は存在しなければならない。かく彼は論證した。完全者が存在すべきこと夫は信仰に於ては實在であらう。スピノーザにとつて、神の存在は精密な論證さへ要しない確信であつた彼は、この絕對永遠な一元的實在者たる神の觀念から、精神と物體との存在を考へた。

神は唯一の實體である。そのものゝ定義から、神以外に實體が存在することも又かく思惟することも不可能である。このことから『擴れるもの及び思惟するものは、神の屬性であるか、又は神の屬性の樣態である。』ことが起る。このことから、神が、擴がれるもの思惟するものに對して內存的原因として考へられ、且各屬性が神の永遠無限な本質を表示する限

りに於て、神は擴がれるものであり思惟するものである。かくして彼の汎神觀は次の命題によつて表示せられた。『有るものは總て神の内にあり、且神なくしてあり又理解されることも出來ない。』(定理十五) Alles, was ist, ist in Gott, und nichts kann ohne Gott sein, noch begriffen werden. これに依つて、無限に多くのものが無限に多くの仕方に於て神の性質の必然から起らねばならぬ。それ等の内知覺の對象としてあるものは、思惟と擴りの二屬性であり且それ等の樣態である。神の屬性樣態は無限であらう。(Spinoza's one infinite substance, God or causa sui, is possessed of innumerable attributes. Only two of them, however, are accessible to human knowledge : extension and thought. Each of these finds expression in particular 'modes'. Thus the various physical bodies are modes of the attribute of extent, and the different individual minds modes of the attribute of thought. But since divine existence is possessed of a countless number of other attributes, its true nature remains unknown to us. Introduction to philosophy. Külpe. 140.) これから神は、悟性の對象たり得る總てのものの能働的原因であり第一原因である。神は自身に對して自己原因であり、悟性の對象たる總てのものに對して内在的原因である。即ち神は『偶然に由ての原因ではなくて、それ自身に由ての原因である。』(定理十六系二) Zweitens folgt, dass Gott durch sich, nicht aber durch ein Hinzukommendes (accidens) die Ursache ist. 故に何者からも强制されることなく、唯その性質の法則に從つて働くのである。何者總て有るものは神の内にあり神なくして考へられ能はざる故に、神の外にはそれを働く樣に決定したり又は强制する何者もない。神には强制するものなく、無限な仕方に於て無限に多くのものが單に神自身の性質の法則に從て起らねばならぬ。可能であることを彼は起ることと言ふ。起ることは來ることである。三角形の性質から、その三つの内角の和が二直角に等しいことが、永遠に同一の仕方に

於て來る如く、必然的に follow するのである。幾何學的方法による彼にとつては、來ると言ふ文字が最も適切であつた。

思惟と擴りとは神卽ち實體の本質を構成するものとして、知覺せられ得るものであり、神の性質から必然的に來るものであつた。カントの語を借るなら『此哲學に於ては、空間時間は本源的存在者(神)其者の本質的規定であるが、併し此存在者に依屬する事物(從つて吾等自身も亦)は實體ではなくて單にそれに內屬する偶然性に過ぎない。』(Kritik der praktischen Vernunft 和譯 249) 而して神の存在は確實である。その定義から存在そのものが起る所の實體である。故に神は永遠であり且神の本質を構成する屬性も永遠である。故に來るとは永遠の來るである。それは超時間的である。(Time is a mere mode of thought, modus cogitandi, there is no before and after, but only eternity. History of philosophy. Thilly. 294) 永遠 aeternitas. とは時間觀念を超脫したる必然的生起の狀態に名づけられたものである。

決定論　神に於ては必然と自由とは同一である。神獨りその性質の單なる必然に由て存在し、働くが故である。卽ち神に於ては必然が自由である。神はその性質の必然的法則に從て卽ち自由に由て、營爲するものなるが故に、神が神の悟性と意志とに由て營爲すると言ふことは否定されなければならない。神が人間の樣に悟性意志感情に支配されると考へることは、誤謬であり、又その原因である。神の性質には悟性も意志も屬しない。(It is self-caused, causa sui, for if it were produced by any-thing else, it would be dependent on that. It is, therefore, free in the sense that nothing outside of it can determine it; it is self-determined in that all its qualities and actions follow from its own nature as necessarily as the properties of a triangle follow from the nature of a triangle. (Thilly. 295) このことから (Es gibt in der Natur nichts Zufälliges, sondern alles ist gemäss der Notwendigkeit der göttlichen Natur bestimmt, auf gewisse Weise da zu

sein und zu wirken. Lehrsatz 29.) この定理が導かれる。彼は明に決定論の姿をとつた。總てのものは自由ではない。必然的にかく決定されてゐる。かくて意志は悟性の如く思惟の或る樣態である。意志は他の原因から決定される場合にのみ存在し且つ營爲する樣に決定されることが出來るのである。即ち人間の意志は自由なる原因ではなくて、必然なる原因である。若し自由意志に由てはたらくと思ふものがあるなら夫は、行爲の原因を知らないからである。

(His mechanistic metaphysics leads him, of course, to a clear-cut determinism. The feeling of freedom which we experience in our actions is simply due to ignorance of the causes. Just as all the properties of a triangle follow from the nature of the figure, so the whole behaviour of every living creature is the necessary consequence of its nature. Külpe 154.) 有るものは總て神の中にあり神なくして考へ得られざる故に、總てのものはかく無限なる因果の連鎖に繫がれてゐる。神の中にあるものは總て自由ではあり得ない。即ち神から或る働を爲す樣に決定されてゐるものは、自身を決定されぬ樣にすることは出來ない。又神から決定されないものは、それ自身を働を爲す樣に決定することは出來ない。總てのものは神の性質の必然に由て、或る仕方に於て存在し働を爲す樣に決定されてゐる故に、ものは其が生じたと異る仕方に於て又他の秩序に於ても神から生ずることは出來ない。有るものはすべて必然である。偶然と呼ばれ得るものはない。ものが偶然と呼ばれ得るのは、吾々の認識の不完全なる時に於てである。此の意味に於て意志の自由は總てのものにつて否定された。唯神に於る必然こそ眞の自由である。

自由意志の否定から一切の目的觀が排斥せられた。何の爲と言ふことはない。唯必然にのみかく有る。Spinoza is as staunch a champion of mechanism as Hobbes. There is no free will to interrupt the connection of cause and effect;

nor is there any end or purpose in things by which the course of events is directed. (Külpe 145.) 自由に考へるのは無知である。彼は新しい科學が正しい自然研究方法として提示してくれた機械觀を以て、物體現象心理現象を説明した。『人々が通常自然の中の總ての物は彼等自身の如く、或る目的の爲に働くことを假定し、且自身が總てのものを定まつた目的に導くことが確實である』と主張することは、スピノーザの哲學體系からは、『吾々の認識の不完全』に由る迷妄に過ぎぬと言ひ得られる。

汎神論　定理十五に由て神は萬物の能働的原因である。又これから(Gott ist die innewohnende immanente, nicht aber die vorübergehende Ursache aller Dinge. lehrsatz 18) なることが立言せられる。何者有るものは總て神の中にある故に、神は内存的原因である。(causa immanens) 有るものは總て、神なくして考へ得られざる故に、神の本質を構成するものとして知覺される萬物は、神の性質から必然的に來りしもの換言すれば所産である。神の所産を即ち萬物を自然と稱するならば、此の自然は神に對して所産的自然 (natura naturata) である。神は所産に對する時能産的自然 (natura naturans) と稱せられる。能産的自然の所産的自然への關係は、神の萬物への關係に外ならない。彼は自分の所説を理解しないであらう人々が、神と自然とを混同せしめんことを未然に防がんが爲に、かく區別したのであらう。此のことは次の事から明らかであらう。世人の疑惑が原因をなして、主著の出版が不可能であつた爲にハーグに歸つた彼は、オルデンブルグの意見を尋ねた。其時スピノーザは『神は總てのものの内的原因であつて外的原因ではない。其故に自然を形體的物質と解して、此を神と視るが如くに解するのは誤解である。』と辯解してゐる。此の辯解は理解を助けるであらう。言語の重複を避けて次の句を用ひたい。God is in the world and the world in him, he is the source of everything that is.

(pantheism) God and the world are one. (Thilly. 296) 此意味に於て神卽自然 Deus sive natura である。此處に於て擴りや、思惟の樣態としての意志欲望愛は所産的然である。彼はかくの如き考へを、新プラトン派又は其影響を受けたエリゲナ等に學んだのであらう。スピノーザの汎神論の先驅を爲した樣に思はれる思想の爲に、十六世紀の最後の年ローマに於て火刑に處せられたイタリーの自然哲學者、Giordano Bruno も次の樣に考へてゐたらしい。(God is immanent in the infinite universe, the active principle (natura naturans); he expresses himself in the living world (natura naturata,) which follows from him with inner necessity. Thilly 289.)

認識論　精神が身體を認知したり、その存在を知るのは、身體が受ける感觸の觀念に由てである。(Der menschliche Geist erkennt den menschlichen Körper und weiss von seinem Dasein nur durch die Ideen der Affektionen, wodurch der Körper affiziert wird. Lehrsatz 19. Zweiter Teil) 人間の精神は身體の感觸を知覺するのみでなく、感觸の觀念をも知覺する。卽ち精神のはたらきそのものを認識するのである。然し精神が感觸に由てのみ形體の存在を知覺する間は偶然としてのみ表象される。其は常に誤謬の原因をなす。若し精神が內部から觀察して、總ての人に共通なる觀念又は概念が起るとき、其は必然に眞であり妥當なる觀念である。人間の精神はかくの如き性質を有してゐると、彼は述べる。

第一種の認識又は意見、表象は誤謬の唯一の原因である。誤謬とは非妥當な卽ち紛糾し毀傷した觀念が包含するものであり、充全な認識の缺乏である。眞實なる意味に於て、神に關係しない觀念に含まれるものである。精神の本質である理性に從つた秩序なくして、現示される個物を、知覺することに誤謬は起原を有してゐる。感官を通じての知覺又は神に關係しない觀念、換言すれば不確實なる經驗に由る認識である。第一種の認識に就ては第三部『感情の起原及び性質に就て』

に於て正しく理解することをのみ努めてゐる。何者憎悪や嫉妬に至る迄あらゆる感情は、吾々の認識に値する特質を有してゐる。吾々の生活に深い關係を持つ、刹那に具現する感情の說明は、最も人目をひくであらう。彼は感情の性質力又は人間の行爲及び欲求を線平面立體を研究する場合と同樣に觀察してゐる。何者總てのものに對する認識、樣式は、常に同一でなければならぬ。又多くの誤謬が、言語を正しくものに適用しないことから起る例として『彼の園が鷄へ飛んだと叫ぶのを聞て、予は彼が眞に言はうとした事を充分よく理解する故に、彼が誤つてゐると信じないのと同樣である』と引用してゐる。

第二樣式に由る認識卽ち抽象的なものに對する理性的認識は眞實であり、眞なるものを誤つたものから區別する光である。彼は『光が自分自身及び暗黑を顯す如く、眞理は自分自身及び誤謬の規範である』Wahrlich wie das licht sich selbst und die Finsten is offenbart, so ist die Wahrheit die Norm ihrer selbst wie des Falschen. と述べてゐる。人間の精神は神の永遠無限な本質の妥當な認識を有することが可能である。何者思惟は神の屬性であるから。彼は第四部『人間の屈從或は感情の力に就て』に於て道德論を爲してゐる。自己保存に有要なるものは善である。善惡の認識は感情である。故に感情から欲望が起る。然し吾々を壓迫する感情から生ずる欲望に妨止されることが出來る。又善惡の認識が未來の事に關する限り、その認識から生ずる欲望は、現在に於る愉快なるものに對する欲望によつて、壓迫されることが屢々である。抽象的なものの認識と現實的感情との對立を畫いてゐる。理性より起る努力である眞の認識を、妨げるものは不快を伴ふ惡である。善とは德である。神の認識卽ち永遠の見地の下での認識は、人間の能ふ精神の最高の德である。理性の認識のままに換言すれば必然の見地から行動するなら、善惡の概念も誤謬も構成されなかつたであらう。死に對する恐もなく直

接に善をのみ欲したであらう。理性の命令によつて生活する人が稀である故に、眞の勇者は、神的性質の必然から起る事に特に留意し、眞實な認識の障礙を遠けることを努むるであらう。

第三種の認識とは何であるか。神の屬性の形式的本質の妥當なる觀念から、物の本質の妥當なる認識に進むものである卽ち直觀知である。此種の認識によつて始めて人間に迄、自由が與へられやう。『自身及び彼の感情を明白且分明に認識する人は神を愛し、且彼が自身及び彼の感情を一層多く認識するに從つて、益々神を愛する』(第五部定理十五)。何者認識とは明に神の觀念を伴ひ且愛は認識の快によつて來るが故である。然し人は神を愛することから、神に應愛されることを求めてはならぬ。何者神には受働と言ふことがない。卽ち感情に動かされることがないからである。神の觀念を伴ふ限り、神を憎むと言ふことは考へ得られない。精神の最高の努力は第三種の認識に於て認識することである。それは精神の最高の快であり滿足である。此は第二種の認識から生ずることは出來る。精神の最高の認識である限り、第三認識から必然に神に對する愛が生れる。それ故に此愛は知的愛と言はれる。

(The mental intellectual love towards God is the very love of God with which God loves himself, not in so far as he is infinite, but in so far as he can be expressed through the essence of the human mind considered under the species of eternity, that is, mental intellectual love towards God is part of the infinite love with which God loves himself.)

神に對する精神の知的愛は、神が自分自身を愛する無限の愛の一部分であつた。神が精神に由て表示せられる限り、神が自身の觀念を伴ひながら自身を觀察する働きである故に、第三種認識から生ずる精神の知的愛は、神が自身を愛する愛に外ならない。

（Das Auge darin ich Gott sehe, ist dasselbe Auge, darin Gott mich sieht. Mein Auge und Gottes Auge ist ein Auge und ein Gesicht und ein Erkennen und eine liebe. The Eastern Buddhist. 3. 1924.）なるエックハルトの語は此處に適切らしく思はれる。

第三種認識に於ては知ることは愛することである。理性と感情とはより高い段階に於て統一せられてゐる。知は卽ち愛である。神は永遠である。直觀知に由る認識に於ては、精神は神の中に永遠の姿を見る。ここに於て第三種認識の第二種認識に對する優越が承認せられる。直觀知に由て認識するに從て、受働的ではあり得なくなる。卽ち惡感情からも死の恐れからも働きを受けることがあり得ない。神秘的直觀に由る神の本質の認識こそ、精神の最高の福祉であり、德そのものである。人は此の福祉を樂しむことによつて又其故に快樂を制する力を有するのである。此處に於て精神は自由を得た。

彼が今や到り得し至上の喜びは、幾何學的方法による論證によつて得られしものではなくて、始めよりの確實な信仰の喜びであつた。唯理主義と神秘主義とはかゝる奇しき結合を爲してゐる。實に幾何學的方法によつて愛にまで說き及ぼしたる人は彼一人であり、彼のみである。單なる感じとしては、『冷やかなれど熱情の愛ある人』かゝる矛盾せる言葉も許されたい。

神の子の心は第一種の認識から、第二種第三種の認識へと進むであらう。それは丁度日向葵が、おのづから太陽の光を慕ふ樣に、人の心は生れながら神を慕つて努力してゐる。

第三種の認識に到ることは困難であらう。否確實に困難である。『大なる勞苦なくして發見されたならば、それが殆んど總ての人から閑却されたことが、どうしてあり得ぬう。』深き底からの悲痛なそれで靜かな言葉は、讀む人の心を感動

せしめずに置かうか。心有る限り、それはゲーテ獨りではない。『然しすべて、貴いことは稀であると同時に困難である。』Aber alles Erhabene ist eben so schwer als selten.

まことにエチカは彼の信仰生活の全現である。肉に包まれし者には肉に由る苦惱がある。うつりゆく世には悲哀がただよふ。されど清き貴さは彼にのみ値あり。不完全なれど完全を恭ふ向日葵には努力こそ美を認めるにふさわしい。眼に遠く心に近きもの、夫はどこにささやくか。